

御状令披見候、
 (徳川吉宗) (徳川家重)
 公方様・大納言様益
 御機嫌能被成御座
 恐悦之旨尤候、将又今度
 年号改元之儀被承之
 珍重之由、得其意候、
 誌面之趣各申談
 可及言上候、恐々謹言
 本多中務大輔
 (元文元年カ)
 六月十二日 忠良(花押)
 (徳山藩五代藩主毛利広豊)
 毛利但馬守殿

「江戸幕府老中奉書」(徳山毛利家文庫「幕閣発給文書」439)

情報と文書館
 つたえる
 つなぐ
 文書館
 #08
 ツタエル・ツタワル ④

幕令の伝達～幕府の意思をどう伝えるか～

江戸時代、幕府が諸大名(江戸時代の大名は260家前後と言われています)にその意思を伝えるために、どのような手段をとっていたのでしょうか。

《個別に伝える》

まずは個別に伝達する方法です。

上の写真は、「老中奉書」と呼ばれるものです。「奉書」とは、主君の意を受けて、家臣が自らの名によって主君の意思を文書にしたためて発給するものです。江戸時代になると、諸大名から寄せられた書状(見舞いや祝いなど)への返礼、江戸城への登城や幕府高官の役宅へ出頭の指示、諸大名からの伺いに対する回答、江戸城諸門の警衛など、大名としての勤めに関する指示などが老中奉書によって大名に伝えられました。多くの老中奉書は、奉書紙という比較的大判な和紙を上下に折ったもの(折紙)で出されますが、呼び出しなどの軽易な内容については、和紙を横に半裁した紙を使って出されました(横切紙)。上の写真は折紙によって出された

もので、その内容は、幕府から改元を伝達された徳山藩主毛利広豊が、書面で祝意を伝えてきたことに対する返礼です(元文改元〔1736〕の時と思われるもの。改元についてはシートNo.9を参照)。

老中奉書は、その月の担当老中(月番)の呼び出しを受けて、藩の江戸留守居などが老中の役宅に出向いて受け取るケースが一般的でした。

《集めて伝える》

ひとつのことを複数に伝えようとした時、一人ひとりに同じ内容を伝えることは効率的ではありません。そうした際、対象者を一堂に集めて伝えれば、より効率性は高まります。幕府の基本法である武家諸法度の発令事例を見てみましょう。

萩藩初代藩主毛利秀就は、寛永12年(1635)6月21日、江戸城に登城しました。これは前日の晩、幕府老中の土井利勝と酒井忠勝連名の奉書が萩藩江戸屋敷にもたらされ、登城が指示されたためです(毛利家文庫19日記4(36の3)「公



徳山毛利家文庫
「公儀事」

徳山毛利家文庫「公儀事」は現在217点を公開しています。

「公儀事」には、幕府から出された文書を書き留めた記録(例：従公儀被仰出帳)と、徳山藩から幕府に提出した文書を控えた記録(例：公儀江被仰上控)の2種類があります。

前者の一部は、「將軍発給文書」や「幕閣発給文書」で原本を見ることができます。

儀所日乗」より)。

さて、江戸城では「大広間」という場所に諸大名が集められ、幕府の儒学者林道春が武家諸法度を読み聞かせています(『徳川実記』寛永12年6月21日条)。こうすることで、一度に情報を伝達することができました。

《回覧する》

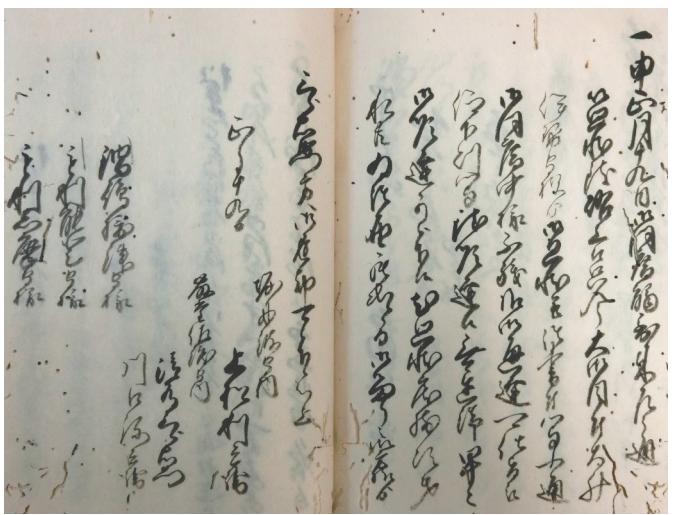
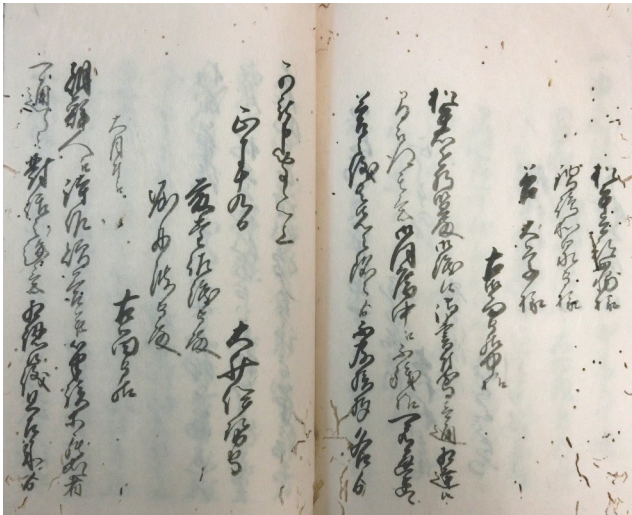
一方で、必要な時に大名や江戸留守居を江戸城や老中などの役宅にその都度招いて指示を出す方法も、効率性の観点からは決して最良とは言えません。また江戸に滞在中の大名には有効でも、帰国中の大名への連絡方法も一考が必要です。結局、個別の呼び出し文書を作ることに繋がり、やはり手間がかかりそうです。

江戸時代、江戸においては大名家の留守居たちは情

報共有などのため、同じ程度の家格や処遇を与えられている者(同席)と言います)などが「組合」(グループ)を作っていました。幕府は、そのグループを利用し、幕府の指示を文面に整え回覧させたり、グループの代表を役宅などに呼んでその用向きを伝え、グループの代表はそれをグループのメンバーに回覧する方法を採りました。廻状(かいじょう)と呼ばれるもので、主に幕府大目付から発せられています。

下の写真は、「同席触廻状」と呼ばれるものの写です。内容は、前年より来朝している朝鮮通信使に随行している学者に行う質問などへの対応についてです。

廻状の構成は、グループの代表の連絡→大目付からグループの代表への指示→老中から大目付への指令、の順となっています。



老中松平右近将監から大目付に出された指令。
(以下文面略)

大目付大井伊勢守からグループの代表への指示書。老中松平右近将監から渡された書付の内容をメンバー全員に報告せ、回覧終了にあたっては、個別にそのことを大目付に伝えるのではなく、グループの代表が報告するように、と指示しています。

この時のグループのメンバー。鍋島揆津守(肥前国蓮池藩五万二千石)・毛利能登守(長門国長府藩四万七千石)・毛利志摩守(周防国徳山藩三万石余)・松平兵部少輔(安芸国広島新田藩三万石)・鍋島和泉守(肥前国鹿島藩二万石)・谷大学(丹波国山家藩一万石)。

グループ代表からメンバーに対する連絡事項。大目付大井伊勢守からの指示でこの書類を回すこと、最後の人が藤堂家の清水三郎右衛門に戻してほしいことを伝えています。この時のグループの代表は堀丹後守(家臣上松利兵衛)と藤堂佐渡守(家臣清水三郎右衛門・川口弥兵衛)です。

徳山毛利家文庫「公儀事」二八「従公儀被仰出帳」
宝曆十四年(一七六四)正月十九日より